

日本の教育思想（1）

～江戸時代の教育機関から見えてくる教育思想～

Japanese Educational Consciousness

— Observations of educational thought from the Edo period —

次世代教育学部教育経営学科

中田 正浩

NAKADA, Masahiro

Department of Educational Administration

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：支配者層，被支配者層，寺子屋（手習所），庶民教育

Abstract：Part of the history of Japan including the Azuchi-Momoyama and Edo periods is known as the 'early modern period'. This period includes the approximately 300 years from 1568 (11th year of the Eiroku period) when Kyoto's Nobunaga Oda proceed to the capital until Tokugawa Keiki's restoration of imperial rule in 1867 (3rd year of the Keio period). During this period a strict social system was formed and the order of Confucian consciousness was maintained. The ruling elite studied Confucianism thought and in order to control the populace attempted to introduce this through moral ideology.

The early modern period education was aimed at fostering a common shared view. However, a look opinions. The different periods, the ruling elite reveals a multiplicity of views.

This paper looks at how learning is not only limited to Confucianism and the national learning but also incorporates aspects such as cultural, social, and educational from the Edo period. Finally, we will discuss about observable aspects of educational consciousness.

Keywords：ruling elite, ruling dynasty, national education

日本史の時代区分において「近世」とは、安土・桃山時代と江戸時代を合わせた時代を呼んでいる。つまり1568（永禄11）年の織田信長の京都上洛から1867（慶応3）年の徳川慶喜の大政奉還及び王政復古宣言までのほぼ300年間を指している。

その間は、強固な身分制度によって形づくられており、儒学思想はその秩序を維持する思想としては、最適な内容を備えていた。従って、支配者層が儒学思想を学び、それを道徳思想としてそれを民衆支配のために利用しようとしたのは当然のことであった。

近世においては、学問と言えば儒学であることは共通認識である。しかし、学問をすることの意味は、時代・支配者・被支配者（身分階層）によって多様であった。

以下、対象は限られたものとなるが、庶民の学問に

対する関心と儒学・国学・洋学などの受容の在り方を、また江戸時代の教育・文化・社会を当時の含めて教育機関を通して概観する中で、見えてくる教育思想について考察するものである。

1. はじめに

近世、とくに江戸時代における教育制度を眺めた時に、人々の教育普及には大きく上（支配者層）からと下（被支配者層）からとの二つに分類できる。その一つは、支配者層の幕府（昌平坂学問所）や各藩（藩校）が直営する教育機関と二つ目は被支配者層としての郷学・私塾・寺子屋などの教育機関を挙げることができる。

今回は、江戸時代における教育制度の中でも被

支配者層（つまり農工商に従事するものに限定）の教育機関、つまり前述の寺子屋などの庶民教育を取り上げる。

しかし、これらの先行研究には、田中克佳の「寺子屋の起源と語源をめぐって」、谷中修吾の「江戸末期の教育～寺子屋教育の考察～」、若林弘吉の「近世村落における寺子屋の設立・発展の要因」関山邦宏の「江戸・東京の寺子屋・家塾について」などを挙げるができる。

その研究内容は、寺子屋の起源、寺子屋の普及度や数量的な増加、それらから江戸時代の文盲率を想定したり、明治時代初期の近代教育制度への接続を試みようとするものが数多く見受けられた。

ただし、寺子屋の研究においても一つ注目に値する研究がある。それは、イギリス人で社会学者のR・P・ドーアが「江戸教育研究」の過程で集約された『江戸時代の教育』（岩波書店・昭和45年刊・全381頁）の中で、第8章に「寺子屋」、第9章に「寺子屋教育の内容」について取り上げている。

R・P・ドーア氏は、欧米の社会学者で彼ほど日本語と日本文化に精通している人はいそうにならない。前述の著書については、研究に着手してから15年の歳月を要した労作であり、それだけの価値のあるすぐれた書物である。

本稿では、彼の著作を通して近世から近代に成長した日本の歩みに対して、次のような新たな視点、つまり江戸時代の学問と教育の普及が支配者層と被支配者層にとって、それがいかなる意味を持つものなのか。また江戸時代に儒学・国学・洋学などの学問への関心が非常に高まったのはなぜかなど、『日本の教育思想』（1）江戸時代の教育機関の背景から見えてくる教育思想を明らかにしたい。

2. 江戸時代における支配者及び被支配者の教育機関と思想的背景

（1）支配者層の教育機関と思想的背景

江戸時代における学問といえば儒学であることは共通認識である。しかし、「なぜ学問をするのか」、そのことの意味は、時代や身分によって多様であった。

儒学者の孔子や孟子の思想を、12世紀になって朱

熹が独自の解釈のもとに表した思想が朱子学である。当時の学問といえば漢学、漢学といえば「朱子学」であり、これを研究し自分の考えを取り入れる漢学者がこの時期に数多く輩出した。

儒学を基盤にした朱子学は、日本においては君臣上下の絶対視を中核とした思想として、庶民には「五倫の道」を正しく実践する生活を時の権力者は求めた。

「五倫の道」とは、封建制度のもとにあって人と人との関わり方、ひいては生き方を説くもので「君臣の義・父子の親・夫婦の別・長幼の序・朋友の信」の規定に従って人と接するようという教えである。

このように人を固定的に見る思想は、強固な身分制的秩序によって形づくられている江戸幕府の幕藩体制維持にとって好都合であった。また、儒学思想はその秩序を維持する思想として、知足安分（現状を満ち足りたものと理解し、不満を持たないこと）などの最もふさわしい内容を備えていた。また、支配者層が儒学思想を学び、道徳思想としてそれを民衆支配の道具として活用するのは当然のことであった。

また江戸時代が進行する中で、学問を専業とし教えることを生業にするようになってからは、儒学そのものが教養としてだけでなく、真理を追究するものになっていった。

ここでは、幕藩体制下における支配者層の教育機関としての昌平坂学問所と藩校を通して、思想的背景について具体的に見ていきたい。

① 昌平坂学問所

前述のごとく近世は、戦いに明け暮れた中世の時代と異なり平和な時代であった。この平和な時代に生きる武士たちも当然のごとく、大きく性格の変容を促された。こうして武士たちは、幕府・藩の政治の運営を司り、農民や町人（職人・商人）層たちを支配していった。

そして、武士の基本的支柱であった文武両道の精神は、「武家諸法度」の第一条に「文武弓馬の道は専ら相嗜む可き事、文を左にし武を右にするは古の法也、兼備せざるべからず」（1615〔元和1〕年）と掲げられており、武士教育の中心に据えられた。このような武断政治から文治政治に移行する世の中での武士教育は各家庭の責任において、教養として調和的な習得が行われた。

このような過程で武士の子弟は、儒学の枢要の書（四書五経）などの素読や手習いなどの読み書きなどを学び、武術の稽古は道場において精進し、道徳的躰けや礼儀作法も日々の生活の中で指導を受けながら、個人的教養として学問と武術の両方を習得していった。こうしたなか、江戸幕府もあえて武士の教育機関を設置しようという動きはなかった。

幕府開設とともに新しい体制と秩序作りをめざした徳川家康も、自ら学問を愛して文教を奨励した。その際に近世朱子学の祖といわれる藤原惺窩やその門人の林羅山を招いた。しかし、家康は必ずしも朱子学思想の意義を十分に理解したうえで彼らを重用したのではなかった。あえて言えば、彼らの該博な知識及び文筆能力を幕政推進のために利用したからである。それを証明するものとして家康が『孔子家語』・『貞観政要』・『吾妻鏡』などの書物を彼らに刊行させたことから、現実の社会に役立つ儒教を採用したのである。

一方、江戸時代が進行する中で武家の生活も貨幣経済・商品経済の中に取り込まれることとなり、彼らの思想や意識も変革をせざるを得なかった。そして武家体制内部においても矛盾が生ずるに至った。その矛盾を克服するためにも江戸や各藩の城下町に武家の子弟に専門的・組織的・計画的な集団教育を施す場が必要となってきたのである。

昌平坂学問所は、旗本・御家人の子弟の教育と藩校の指導者養成の機能を要した江戸時代における最高学府であった。その昌平坂学問所は、3代将軍家光のころに上野忍岡にあって林家の私塾の湯島聖堂であった。その後、儒学を好んだ5代将軍綱吉のときに、現在の湯島の昌平坂上（神田明神を中心とする一帯）の地に移されて、江戸幕府の公的教育機関としての性格を強くしていった。

綱吉は、儒官職（儒学で仕官）を新たに設けたり、積奠（＝積菜奠幣・蔬菜を供え幣を飾ること）に出席したり、綱吉自ら儒書の講義を行った。このような綱吉の儒教崇拜の態度は、当時の諸大名にも大きな影響を与え、儒学を大きく盛んに向かわせた。

この積奠は、中国渡来のものであったが、江戸時代に始まったものではなく、701（大宝1）年に朝廷ですでに行われていたものである。この儀式は、周の時代では一年を通じて実施されていた

が、隋の時代には一般的に春と秋に実施されるようになった。日本では、15世紀までは定期的に実施されていたが、それが江戸時代に復活したのである。

江戸時代の諸大名は、この儀式をかなり重要視し、佐賀藩2代藩主鍋島光茂の3男によって創建された多久聖廟では、孔子にお供えをする儀式「積菜」が、現在も執り行われている。

聖堂の維持経営形態に変化が生じたのは、享保期（1716～1735）の8代将軍吉宗の時代であった。林家が一般の士庶を対象に開放していた公開講釈を享保2（1717）年から日講制に改めた。これは、儒教主義的道徳の庶民への浸透を狙いとする庶民教化政策であった。享保3（1718）年からはこれとは別に、林家の仕事の延長としてではなく幕府の直営として、幕府諸士（旗本・御家人）を対象とした御座敷講釈が営まれるようになった。これらは、幕府が聖堂を幕府自らの目的のためにも使用する意図を明らかにしたものである。

その後、林家の人材不足で湯島の聖堂は衰微し、18世紀中頃には全国各地の農村では百姓一揆や都市における打ちこわしなどが頻発し、幕藩体制の根幹を揺るがすほど危機の時代であった。このような状況の中で松平定信は寛政の改革を実施した。

幕府は寛政2（1790）年に寛政異学の禁を出し、聖堂と林家塾においては朱子学を講究すべきことを明らかにした。この禁令は、思想・学問を統制するとともに、幕府の官僚養成を図ろうとした。このような過程で、湯島の聖堂は林家の家塾（林家塾）から、幕府の公的教育機関としての性格を強め、1797（寛政9）年の改革によって、旗本・御家人の子弟を教育し人材を育成する幕府直轄の昌平坂学問所として成立した。

学問所の学科組織は、経・史・文の三科で、教科書は小学・四書・五経・近思録・国語・史記・陶淵明集などであった。授業の方法は素読・講釈・会読・輪講などであった。学問所の生徒は、幕末の時勢の推移のなかで次第に減少していき、学問所の改革を余儀なくされた。そこで、1867（慶応3）年には農・工・商の有志者の入学を認め、生徒の増加を図った。

また指導者にとって必要な実用的教科として「皇朝史学」（＝国史学）、「刑政学」（＝法律学・政治学・経済学・地理学など）「外国事実」（＝洋

学)などの科目を新たに設け、時勢に応えようとした。

以上のような変遷を経た昌平坂学問所は、1868(慶応4)年に明治新政府に移管され、その後、昌平学校・大学校・大学と改称し、1871(明治4)年まで存続した。

② 藩校

応仁より慶長年間の100余年は、大いに天下が乱れた戦乱の世であり、書など読む人は皆無で、弓馬を学び槍を提げて戦場に赴くのが常であった。それ故に、そこにあったのは文化的社会ではなく、文盲社会であった。その江戸時代の初期を概観すると、専用の建物で専門の教師により正規の教授課程に則って、指導が行われていたわけではない。各々の武士の家庭においては、両親や私的に雇われた家庭教師から書物や経験知から生み出された知(内容)を伝授していたのが実態である。また中には、一部の学才のある奇特な武士が、仲間の子弟を集めて自宅で指導する動きも見られた。

藩校設立の歴史を眺めてみると、1636(寛永13)年の盛岡藩の藩校が、恐らく藩校設立の草分けと考えられる。そして、1755(宝暦5)年に熊本藩で藩校が設立され、その後は、1790(寛政2)年に幕府学問所の改築及び機構改革や寛政異学の禁が行われた時期に、藩校が急速に発達している。1800年頃には、大藩はいずれも自らの藩に藩校を設置した。1838(天保9)年には、水戸藩が藩校として弘道館を設立した。

藩校を成立過程から眺めてみると、大きく次の三つに類型化される。

表1 「藩校成立の過程について」

藩校成立の過程	藩校名
①藩士に経書の講釈を聞かせた講堂から発達した藩校	篠山藩の振徳堂・新発田藩の道学堂・和歌山藩の学習館など
②藩内の私塾ないし家塾から発達した藩校	岩槻藩の遷喬館・久留里藩の三近塾・尾張藩の明倫堂・山城淀藩の明親館など
③初めから藩校としての規模と組織を完備して出発した藩校	熊本藩の時習館・米沢藩の興讓館・萩藩の明倫館・水戸藩の弘道館など

(引用文献①②から筆者が作成)

藩校の名称を見てみると、同一名称の藩校が全校各地に設立された。その理由は、藩校名を儒教経典の中から語句を選択し、なおかつ武士教育が目指すべき儒教的・道徳的思想に相応しい名称として名づけたのであろう。この趨勢は、まさしく儒学が武家社会に溶け込んだことを証明している。

表2 「同一名称の藩校について」

藩校名称	藩校の同一名称の藩名
明倫館	萩藩・田辺藩
弘道館	水戸藩・佐賀藩、彦根藩
時習館	熊本藩・豊橋藩

(引用文献①から筆者が作成)

以上のように設立された藩校数は、明治4年の廃藩置県までに255校の多くを数えた。[このうち、187校は1751(宝暦)年以降の設立]藩校の中には、明治以後、各地の教育の中心的存在となった例が多かった。

なぜ、このように各藩が競って藩校を設立したのか。また藩校設置を各藩に促した動機は何だったのだろうか。それらは、当時の人々の社会的秩序を維持するための手段であったことや武士が学問を修得することは彼らの道義をより向上させるものであったと考えられる。それを裏付けるものとして、当時の書簡などから伺い知ることができる。学問を学ぶことによって主君に対する義務に自覚がさらにたかまるばかりでなく、なお一層武芸の修練に身を入れさせる効用があったと貝原益軒も述べている。

その他には、幕藩体制の矛盾として商品経済の発展に伴って藩の財政危機の打開や富国強兵策などの藩政改革を実施するために、有能な人材をどのように確保するかが諸藩の課題となり、組織的な教育機関の開設が諸藩において活発化したのである。藩校の設立目的としては、幕藩体制への原点回帰とその強化が意図されていた。

ところで、藩校の教授陣はどのような人物が任用されたのか。教授任用にあたっては、人物そのものが最重要視され、どの学派に所属していても問題ではなかった。具体的には、昌平坂学問所出身者、藩校出身の藩士、藩内外の民間の儒学者出身者など種々様々であった。

藩校は各藩の藩士の子弟を教育するための教育

機関であるので、藩士の子弟が大半で7、8歳で入学し、15歳～20歳で退学するのが通常であった。藩校において教授される内容と方法について、江戸時代の前半期では個人的な徳の涵養を主な教育目標にしていたので漢学を主に学び、武芸も加えられていた。後半期には諸般要請に応えるために、算術・医学・洋学・天文学・兵学などの実用的な科目が併設された。

藩校へ入学したものは、「素読」(『孝経』・四書五経などの経書を正しく読むこと)から始まり、読書力が充実してくると「講義」(「素読」に用いた教科書の意味・内容を理解すること)を受講した。次に進むのは、「会講」・「会読」・「輪講」で、教科書は経書や歴史書であった。大半の受講生は、おおよそこの辺りの学びで退学をしたのである。学習内容は、座学ばかりでなく、藩校に併設されている道場で武芸の稽古もさせた。これはいかに平和が続くときであっても、戦に備える準備を怠ることなく、尚武精神を日常生活の基礎に置くことが要請されていたからである。

(2) 被支配者の教育機関と思想的背景

① 寺子屋 (関西では寺子屋・関東では手習所)

ここでは、寺子屋の起源(中世における寺院の世俗教育に求めたり)や寺子屋の総数(約16,000であったり30,000～40,000に達していたりとか)については、本稿の“はじめに”で述べたように、研究者によって定説が定まっていない(つまり断片的資料しか存在しないので、推測の域を出ない)ので、あえて本稿ではふれないこととする。

その寺子屋も、最初は江戸、大坂といった大都市で設けられたが、幕末に入る天保年間(1830～1844)頃からは、農村や漁村の隅々まで開かれるようになった。

さて、前述の支配者層が学ぶべき昌平坂学問所や藩校などは、理論教育が中心であった。しかし、非支配者層が学ぶ寺子屋が設立され、発展した要因は何であったのか。それは、①幕藩体制下における庶民の教化策、②江戸経済の米中心の自然経済から商品の流通による商品・貨幣経済に適応するための要求(契約書・帳簿・書類・手紙など)に応えるべく初歩的な知識や技術を授けるために、自生的に設立された私設の教育機関である。この2点が、近世社会の特有として経済的、文化的諸条件の発達に、寺子屋に関する設立・発

展の要因であると、戦前・戦後の先行研究で明らかにされたものである。

寺子屋で授けられた実用的教育は、日常的な商取引つまり証文の交換、帳簿の記入、書簡の作成などの行為に読み書きや算術が必要なための基礎教育であり、身分制度の厳しい近世社会で庶民が生産活動を営むために必要な初歩的知識や生活の知恵が要求されていたのである。

決して、寺子屋の実用的教育が商取引のみに活かされているのではなく、支配者にとって最も有効であったのは、文字の普及であった。庶民が寺子屋で文字を習得することは、幕府・諸藩にとって法令類(御法度・御触書・御高札など)を文書の形で広く指示・命令をすることで、支配・統制が効率的に実施することが可能となった。また、農村でも年貢の徴収や治安の維持のために、領主支配を代行させる村役人(名主・組頭・百姓代)にも、読み書き算術の能力習得は必須のことであった。

前述の法令類を簡略化したものを寺子屋の教科書として活用することを奨励した。その結果、幼少時代からそれらの内容について理解させることで効用が見受けられた。

次に、寺子屋における師匠(教師=設立者・経営者)と寺子(生徒)の関係について見ていきたい。寺子屋の大半は、師匠の住居の一部を開放して学びの場にしていった。

師匠の資格としては、必ずしも特定の知識階級ではなく、多少の学識があれば、身分・性別を問わず、誰でもがなることができた。師匠を身分的に見てみると、庶民・武士・僧侶で8割5分を占めており、その他は医者・神官であった。師匠をもう少し具体的に見ていくと庶民では、町年寄や隠居と呼ばれた人々、農漁村では庄屋や組頭のような支配層が務めていた。これらの順位も地域・時代により異なる。

寺子屋の寺子は、親が師匠を選び普通7～9歳で入学し、3～5年間学んで終業するのが平均的であった。入学時には、机(天神机)や文庫(書籍その他、手回り品などを入れる手箱)などを調べ、吉日を選んで赤飯で祝って天神様に祈願のお参りをするのが一般的であった。入学に際しては、束脩(そくしゅう・入学金)や謝儀(授業料)、暁料、炭料などを取めた。この時、金銭での納入の他に、米穀などの農産物や反物、酒肴な

どの物納の場合もあった。盆暮れや正月などには、祝儀・謝礼等が行われる場合もあり、寺子屋に通うには相当な教育費がかかった。

教育内容は、「読み書き算盤」が基本であり、中核となったのは習字であるが字を上手に書くだけでなく、それを通じてものを読むということも教える。それを「手習い」と称した。手習いを通して様々な社会的知識や言葉遣い、儒教思想である長幼の序、師弟関係、友人関係、さらには心学の教えを踏まえての親孝行や正直、食事・身繕いの望ましい在り方などの道徳教育も教えられた。作法は「御行儀」として大切な内容であった。中でも、女子は主人などに仕えて家を守る者と規定され、衣服の始末、裁縫の初歩、插花、碾茶などの基本が教えられた。

教科書としては、「往来物」という名で呼ばれる文書が使われた。もともとは、手紙文の教科書的な役割を果たすものとして平安時代後期の11世紀半ばに編集されたものである。それが、江戸時代になると手紙文体のものに加えて韻文・散文体の教科書として使用するものを「往来物」と呼ぶようになった。「往来物」は教訓・社会・語彙・消息（手紙文）・地理・歴史・産業・理数などの各分野にまたがり、その数は約7,000種（うち女子用が1,000種）にもものぼった。

寺子屋を地域限定にして、京都を『京都府教育史』で概観すると、「読み物」では一般的に勉学の勧めや日常道徳などについて仏教語をまじえて説く『実語教』や今川了俊が弟の仲秋に書き与えた二十三か条の制詞家訓である『今川状』が多く用いられている。「習字」では伊呂波、数字、方角、干支、家名盡、町名、都名所、国名、手紙文、など商人に対して実践的な手ほどきが師匠からなされた。また、商家の子どもを対象にした教科書が作られ「抑、生商売之家輩、從幼稚之時、先、手算術之執業、可為肝要者也」と『商売往来』では、商人対象に手習いと算盤の必要を説かれていた。「四書」「五経」、「唐詩選」などの漢文も特別に教えられた。「算術」は生活に役立つ八算見一（一桁の割算の九九と二桁の割算の九九）、異乗同除、同乗異除、利息などを主に、開平開立など高度なものも専門家について習得をした。女子には『百人一首』、『女今川』、『女大学』を教えた。

商品経済の発達、自然経済に依存してきた農

民層にとっても、帳簿をつけたり、証文や手紙文を書いたり読んだりする必要を生じさせ、読み書き算盤の習得を必要不可欠なものにした。これに伴い、農村部にも寺子屋が創設され、急速に広がりを見せた。このように18世紀以降になって寺子屋が都市部だけでなく、農村部にまで拡大された理由は、幕府が庶民教育の手段として、寺子屋で道徳的教育の勸奨や統制を加えたことによるものであった。

② 私塾

近世社会には、儒学をはじめとして国学・蘭学などが盛んになるとともに、それらを教授する私的な教育機関として私塾が数多く設立された。これらは、幕府や各藩の政策とは関わりなく、自由に開設された。もう少し近世社会の中において私塾がどのように発生し、それぞれの私塾がどのようなつながりを持ちながら、近世の教育を動かしてきたのかという問題にも触れてみたい。

表3 「江戸時代における私塾一覧」

私塾の種類	私塾名
漢学塾	中江藤樹の藤樹書院・伊藤仁斎の古義堂・荻生徂徠の護国塾 皆川淇園の弘道館・細井平洲の嚶鳴刊・管茶山の廉塾 広瀬淡窓の咸宜園・吉田松陰の松下村塾
国学塾	本居宣長の鈴屋・平田篤胤の気吹屋・大國隆正の報本学者
蘭学塾	大槻玄沢の芝蘭堂・伊東玄朴の象先堂・緒方洪庵の適塾

(引用文献③から筆者が作成)

具体的に私塾の動きについて追ってみたいと思う。私塾は支配者層や被支配者層の区別なく、当事者の自発性及び好学心に基づいて幕府や藩の許可を得ることなく自由に開設された。私塾の多くは寺子屋のように指導者の自宅の座敷を学びの場として、指導者の学統・学派に基づき寺子屋よりはレベルの高い教育が行われていた。

塾生は、指導者の学問の深さや人格を慕って全国から、身分・年齢・能力・出身地などの異なる青年たちが入学してきた。

『日本教育史資料』によると、私塾数は1,500を超えていたと予想され、私塾の規模も門弟数人が

ら千人を超えるものまで、様々であった。また開設が1830年代の天保年間以後に急増している。

なぜこのように私塾が発達したのかといえば、①寺子屋で学んだ庶民の教育要求の高まりで、よりレベルの高い教育を受けたいという願望の出現、②封建体制が揺らぐ中であって、新しい指導原理や知識・技術を学ぼうとする機運の高まり、③このような時代の流れの中で、地方から学問や知識を渴望してやまない若者の都市への遊学が増加したことによる。

以上のように、実力をつけた塾生は、様々な分野で活躍し、その多くが幕末から明治にかけて日本の近代化に貢献したのである。

3. まとめ

一昨年から「教育原理」（主に体育学部の学生を対象）を担当したり、『次世代の教職入門』で「日本の教育制度と教員養成の歴史」を執筆した際に感じたことであるが、今一度、教育の原点である“日本の教育思想”について、筆者自身の研究のためにその時代の文化や社会を踏まえた論文が書ければと思っていた。

その折に、古本屋で前述したR・P・ドーアの著書『江戸時代の教育』と出会い、一気に読んでしまった。記述内容は、江戸時代の学問と教育についてであるが、詳細に描かれていたのは藩校と寺子屋に特化されていた。それゆえに、私塾については詳細に記述がないので、そのあたりを今後の研究材料が見つかったと言えよう。

今回、題目を“日本の教育思想”としたために、まとまりのつかないこととなり、身の丈に合ったシリーズで、時代を区切りながら毎年『環太平洋大学紀要』に投稿することとした。

さて、まとめとして日本が近世に入った1872（明治5）年に欧米諸国の教育制度を基盤に作り上げた「学制」公布は、縷々述べてきた江戸時代の教育機関の活動が、日本の近代教育の樹立に大きな影響を与えたことはいうまでもない。

引用文献

- ①木下 法也他（1987）『教育の歴史 西洋と日本』学文社 73頁～74頁
- ②寄田 啓夫他（1993）『日本教育史』ミネルヴァ書房 50頁
- ③木下 法也他（1987）『教育の歴史 西洋と日本』

学文社 78頁

参考文献

- ①中田 正浩編（2011）『次世代の教職入門』大学教育出版（297頁）
- ②中田 正浩他編（2012）『次世代の教育原理』大学教育出版（159頁）
- ③頼 祺一編（1993）『日本の近世 第13巻 儒学・国学・洋学』中央公論社（390頁）
- ④ひろた まさき編（1994）『日本の近世 第16巻 民衆のこころ』中央公論社（344頁）
- ⑤R・P・ドーア（1970）『江戸時代の教育』岩波書店（321頁）
- ⑥「講座 日本教育史」編集委員会（1984）『講座 日本教育史』（第2巻）近世Ⅰ／近世Ⅱ／近代Ⅰ 第一法規出版（406頁）
- ⑦梅根 悟（1988）『新装版 教育の歴史』新評論（242頁）
- ⑧高尾 一彦編（1968）『近世の庶民文化』岩波書店（328頁）
- ⑨寄田 啓夫・山中芳和編著（1993）『日本教育史』ミネルヴァ書房（202頁）
- ⑩木下 法也・池田 稔・酒井 豊編著（1987）『教育の歴史 西洋と日本』学文社（261頁）
- ⑪『岩波講座 日本歴史12 近世4』津田 秀夫（1976）『教育の普及と心学』岩波書店（362頁）
- ⑫京都市教育委員会・京都市学校歴史博物館編（2006）『京都学校物語』京都通信社（96頁）